



Title	殺害の時間の問題 : 出来事に関するD. デイヴィドソンの見解をめぐるある論争について
Author(s)	柏端, 達也
Citation	年報人間科学. 1993, 14, p. 117-130
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10133
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

殺害の時間の問題

— 出来事に関する D・デイヴィドソンの見解をめぐるある論争について —

柏端 達也

1. 殺害の時間の問題

一九七〇年代の初め、次のような問題が、出来事に対するデイヴィドソンの考え方に対して、複数の論者からそれぞれ独立に提出された。⁽¹⁾

たとえばジョーンズがスミスを銃で撃ち、それがもとでスミスが三時間後に死んだとする。その場合次のように言うことは正しい。

(a) スミスが死ぬ三時間前にジョーンズがスミスを撃った。

(Jones shot Smith three hours before Smith died.)⁽²⁾

問題が個別的な出来事についてのものであることを明確にした方が

よいだろう。ジョーンズがスミスを撃ったのは一回だけであり、また(きわめて常識的に)スミスの死も一回だけであったと仮定しよう。すると(a)の代わりに次のように言うことができる。

(b) スミスの死の三時間前にジョーンズによるスミスの狙撃があった。(The shooting of Smith by Jones occurred three hours before Smith's death.)

ところでこの状況で次のように言うことに問題はない。

(c) ジョーンズがスミスを殺した。(Jones killed Smith.)

ここでジョーンズがスミスを殺したのもたった一回であったと考え

るべきだろう。さて、撃つことによつてジョーンズがスミスを殺したこのような状況において、そのジョーンズによるスミスの狙撃とジョーンズによるスミスの殺害の関係は、どのようなものであろうか。デイヴィドソンならそれは同一であると言つたろう。⁽³⁾ すなわち、

(d) ジョーンズによるスミスの狙撃＝ジョーンズによるスミスの殺害。(The shooting of Smith by Jones＝the killing of Smith by Jones.)

この結論はデイヴィドソンの出来事に対する考え方を特徴づけるものである。私は、こうした状況において(d)のような同一性言明が成り立つというテーゼを、「デイヴィドソンの同一性テーゼ」と呼ばう⁽⁴⁾と思う。

だがここで問題が生じる。その同一性言明(d)と(b)から、

(e) スミスの死の三時間前にジョーンズによるスミスの殺害があった (The killing of Smith by Jones occurred three hours before Smith's death)

が導き出されるのである。この(e)には奇妙な響きがある。個別的な出来事を指示する単称名辞を使用しない形——たいていはこの形で問題にされるのであるが——にすると、奇妙さがはつきりするかも

しれない。

(f) スミスが死ぬ三時間前にジョーンズがスミスを殺した。
(Jones killed Smith three hours before Smith died.)

(e)や(f)が看過できないほど奇妙であり間違っているのなら、(a)からそこに至るまでのどこかに不都合があったのである。

たしかに上の議論は、一見して、(d)を受け入れることの不条理さを示しており、デイヴィドソンの同一性テーゼに対する反例を提供するようである。事実、A・ゴールドマンとJ・キムはそろつてこうした議論の存在に満足している。⁽⁵⁾ (ただし後で見ると、この議論はデイヴィドソンのテーゼに対する決定的な反証とならない。) 問題点を次のように言い表すこともできるだろう。もし(e)や(f)が正しいのなら、ジョーンズによるスミスの殺害はスミスの死の三時間前すでに終了していることになる。しかし現実には、ジョーンズによるスミスの狙撃が終了したあとスミスが死ぬまで「ジョーンズがスミスを殺した」、「ジョーンズによるスミスの殺害はすでに終了した」と言うことができない。そのため、何人かの論者は、いつジョーンズがスミスを殺したのかという点に関して——つまり殺害が占める時間領域に関して——デイヴィドソンが述べたことは間違っている、という結論に達した。それにともなつて彼らの側では次のような問題が生じる。すなわち、それではいったいジョーンズはスミスをいつ殺したのか。ジョーンズによるスミスの殺害はい

つ起こつたのだろうか。⁽⁶⁾

以上のいわゆる殺害の時間の問題に関して、その後多くの哲学者が様々なことを述べたため、状況は一見錯綜している。しかしながらデイヴィドソンに対する諸反論を整理すると、その中に、二つの比較的首尾一貫した立場を見い出すことができる。前述の同一性テーゼはその整理の際の一つの重要な指標となる。以下ではまず、デイヴィドソンに対抗するそれら二つの立場を順に検討する。そしてそのあと、殺害の時間の問題をめぐる論争とは結局何であったのか、それが示唆するものは何であるのかということについて、八十年代以降の出来事論および行為論の展開を踏まえて、述べてみたい。

2. 殺害は狙撃よりも長い時間領域を占める

別の行為であるという立場

ある論者は次のように考える。スミスが死ぬ前に「スミスの殺害はもう終わった」と言うのは正しくない。その時点で殺害の行為はまだ終わっていないのである。スミスの死によって、はじめてその殺害は完了する。ジョーンズによるスミスの殺害は、スミスの死を含んでおり、ジョーンズによるスミスの狙撃よりも長い時間領域を占める別の行為なのである。⁽⁷⁾ 殺害の問題を最初に提起したL・デイヴィス、およびJ・J・トムソンは、二人ともこのように考え、(d)を退ける。するとたしかに、厄介な(e)や(f)は導出されない。

「いつジョーンズはスミスを殺したのか」という問いに対するト

ムソンの答えは次のようなものである。ジョーンズによるスミスの狙撃が一九九二年一月一日の正午、スミスの死亡が同日午後三時であったとしよう。すると問いの答えは、「一九九二年の一月一日に殺した」あるいは「殺害の開始時間は一日正午、完了時間は同日午後三時である」というものである。⁽⁸⁾ 出来事が生じた時点を細かく特定することに限界があるということに関して、(その論点がここで関係するかどうかはともかく)彼女は正しい。

ところで、この立場の人々がゴールドマンやキムの極端な見解を受け入れるとはかぎらない。それどころか、ある種のデイヴィドソンの同一性言明を認めさえするかもしれない。たとえばデイヴィスは(d)は退けるものの、ジョーンズによる狙撃と、彼が「撃て」という命令に従ったことが同一になる場合があると考える。⁽⁹⁾

しかしいずれにせよ、デイヴィスやトムソンらのこの立場では、別の、重大さにおいて劣ることのない反直観的な帰結が導き出されてしまうのである。

まず、彼らによればジョーンズによるスミスの殺害は、ジョーンズによるスミスの狙撃の終了後もしばらく進行していたことになる。だがそうすると、われわれは不自然な現在進行形の使用を認めなければならなくなる。つまりジョーンズがスミスを撃ってからスミスが死ぬまでの間、ジョーンズがどこで何をしようとして「ジョーンズはいまスミスを殺している」と言っていることになってしまふのである。トムソンはこの不自然さに気づいている。しかし彼女はそれが重大であるとは考えない。少し妥協をして「殺す(kill)」の

用法を拡張しなければならない、と述べるのである。はたしてその修正は「ほんの少し」のものであろうか。トムソンは不自然さが見かけ上のものにすぎないことを示そうとして、いささか迂回した議論を展開しているが、その議論に説得力があるとは思えない。⁽¹⁰⁾

さらに関連して、この立場は「死後の行為」を認めることになる。⁽¹¹⁾ 極端な例をあげよう。アリストタルコスがコペルニクスの天動説を先取りしたことは、とにかくアリストタルコスが為したことである。デイヴィスやトムソンによれば、そのアリストタルコスによるコペルニクスの天動説の先取りは、アリストタルコスによる考えの表明とは別の、コペルニクスによる天動説の提起を含む出来事である。しかしすると、アリストタルコスは死後何百年もの間、何ごとかを為し続けていたことになるのである。⁽¹²⁾

3. 標的の死によって狙撃が殺害に変化する という立場

狙撃と殺害の同一性を否定する前節の論者達は、しかし、デイヴィドソンとある前提を共有している。同一の出来事ならば同一の時間領域を占める、という前提である。その前提を退ける哲学者もいる。出来事の時間特定についてデイヴィドソンは誤っているが、彼の同一性テーゼは妥当である、と考える論者である。A・R・ホワイトやJ・F・フォルラートがこの立場をとっている。⁽¹³⁾ 彼らによれば、スミスが死ぬまで「ジョーンズがスミスを殺した」と言えない

のは、その時点でまだジョーンズによるスミスの狙撃が殺害になつていないからである。そして殺害の性質を獲得する前に狙撃を「殺害」と呼べないということは狙撃と殺害の同一性を何ら脅かすものではない、というのである。

ホワイトによれば、問題のケースでは狙撃がまだ殺害でない時期があるので、殺害と狙撃を同じように時間特定することはできない。そのため（われわれの例で言えば）「いつジョーンズはスミスを殺したのか」という問いに対して、「一九九二年一月一日」以上に精密に時点が特定された答えは不可能である、とホワイトは考える。⁽¹⁴⁾ それはトムソンの答えの一つと同じであるが、殺害を狙撃が始まり標的の死で終わる出来事と考えない点で、トムソンやデイヴィスらと異なっている。標的の死は殺害という出来事に構成要素として含まれるわけではないのである。殺害は狙撃ほど精密に時点を特定できるとはかぎらないとホワイトは述べる。われわれのケースで「ジョーンズによるスミスの殺害は何時に起こったのか」と問うことも「何時に始まり何時終わったのか」と問うことも、不適切ということになるのだらう。ホワイトやフォルラートにとって、時刻に関して為しうる適切な問いは、「その狙撃は何時に殺害になったのか」だからである。

だが、「標的が死んだときに狙撃は殺害になる」という言い方はわれわれを当惑させる。いったい何がそうなるのだらうか。ホワイトは、初めて店頭に並んだときはまだベストセラーでないが後にベストセラーになる本の喩えを使っている。⁽¹⁵⁾ フォルラートは、イギリ

スの女王と、そのイギリスの女王が存在する二十六年前からすでに存在していたジョージ六世の長女との同一性を、引き合いに出す⁽¹⁶⁾。

注目すべきはむしろそのアナロジが破綻する点である。「出来事は、ある仕方では他の何かと関係づけられるようになるというかぎりにおいて、『変化』する」と述べる⁽¹⁷⁾とき、フォルラートは全く正しい。しかしその『変化』は、単に関係的であるだけでなく、いわゆる典型的な「単なるケンブリッジ変化 (here 'Cambridge change')」なのである⁽¹⁸⁾。出来事がその種の『変化』しかしないうことは、出来事も変化するということを示しているのではなく、出来事は変化しない⁽¹⁹⁾ということを示していると考えるべきである(さもないければ、数の5も変化することになってしまうだろう)。

「変化する (change)」、「〜になる (become)」といった表現を額面どおりに受け取りすぎると、標的の死の時点で殺害に変わるの⁽²⁰⁾は何かということが問題になる。それがすでに終了した行為、すなわち狙撃や引き金を引くことや人差し指を曲げることである⁽²¹⁾と言⁽²²⁾うのはやはり奇妙である。そこでフォルラートは「出来事それ自体 (event *per se*)」という考えに至る。彼によれば出来事は、出来事それ自体としては無時間的に存在し、他方、特定のタイプの出来事の事例としてのみ時間的な位置づけをもつのである⁽²³⁾。私は、そのような大袈裟な観念に訴えずに済むのであれば、その方が好ましいと思う。

4. デイヴィッドソンの側からの反論

デイヴィッドソンは、(e)や(f)には動じない。彼によれば、問題のケースで殺害と狙撃は同一であり同じ時間領域を占めるのだから、それらの帰結はむしろ当然で、奇妙に聞こえるとしても「われわれの方から歩み寄る」必要があるのである⁽²⁴⁾。そしてデイヴィッドソンの側は、対立するいずれの立場も出来事の特徴と出来事の記述の特徴を混同している、と反論することだろう。すなわち、スミスの死はジョーンズによるスミスの殺害という出来事に含まれるのではなく、ジョーンズによるスミスの殺害という出来事の記述に含まれるのである。またスミスの死によって、それ以前に生じた出来事が変化するのでなく、その出来事についてわれわれが記述しうる⁽²⁵⁾ことが変化するのである。そして、狙撃があった後もスミスが死ぬまで「スミスを殺した」と言えないのは、その狙撃が殺害であったことを明らかにする材料をわれわれがまだ手にしていないからであり、⁽²⁶⁾けっして、殺害という行為がまだ終わっていないからでも、狙撃という行為がまだ殺害という行為になっていないからでもない⁽²⁷⁾。

実際、デイヴィッドソンの考えに沿ってしまえば、(e)は少しも奇妙でない。デイヴィッドソンは、「殺すこと」は「死をひき起こす何かをすること (doing something that causes a death)」である、と述べている⁽²⁸⁾。それに従えば、問題の(e)は

(g) スミスの死の三時間前に、スミスの死をひき起こしたジョー
ンズの行為があった (Jones's action that caused Smith's
death occurred three hours before Smith's death)

となり、奇妙さは消滅してしまう。あるいはまた、アンスコムが示
唆するやり方で(e)を言い換えると、

(h) ジョーンスによるスミスの殺害であったことがあとで判明す
る行為が、スミスの死の三時間前に起こった (The act
which, as things turned out, was the killing of Smith by
Jones occurred three hours before Smith's death)

となり、やはり奇妙さは除去される。

以上の『反論』は、デイヴィドソンの立場を敷衍したものにすぎ
ず、対抗する立場を決定的に論駁するものではない。しかし状況が
デイヴィドソンの側に一方的に不利なわけでもない。これまでです
で、デイヴィドソンに対抗する立場においても同様に反直観的な帰
結が生じることを示してきたので、(e)や(f)の奇妙さは相対的に和ら
げられていることだろう。もちろん、なお、いずれの立場も自らが
抱える奇妙さを「奇妙だが真実である」と主張することができる。
デイヴィドソンの立場をさらに進んで擁護するのであれば、(e)や
(f)の奇妙さが何に由来するのかを明確にし、その奇妙さを説明し去
る必要がある。残念ながらデイヴィドソンは、その奇妙さについて、

それと和合せよと述べるのみで、その起源を詳しく探っていない。
しかし(e)や(f)の奇妙さはいくつかの興味深い論点と関わっているの
である。

5. 「いつジョーンスはスミスを殺したのか」 の多義性と行為文の論理形式

「いつジョーンスはスミスを殺したのか」という形の問いが多義
的であることは、早くから指摘されていた⁽²⁴⁾。たしかに、問題のケー
スで「一日の正午」と答えても、「午後三時」と答えても、それぞ
れ文脈に応じて適切である。この多義性は、じつは(c)の文「ジョー
ンズがスミスを殺した」が二種類の出来事に関わっていることに由
来している。そのことは、デイヴィドソンが一九六七年の論文の中
で行為文(出来事文)の論理形式について述べたこととずれている
ように聞こえるかもしれない⁽²⁵⁾。そこで提案された仕方(c)の論理形
式を表記すると次のようになるからである。

(i) (Ex) (Killed(Jones, Smith, x)).

しかし「殺害」を「死をひき起こす何かをすること」と考えるデ
イヴィドソンからすれば、当然次のような論理形式も付け加えるべ
きだったのである。すなわち、

- (j) (3x) (3y) (Action(Jones, x) & Died(Smith, y) & Caus-
ed(x, y)).⁽²⁶⁾

この(j)を見れば、「いつジョーンズはスミスを殺したのか」が、ジョーンズによるスミスの狙撃の時点(それは殺害の時点と同じである)を尋ねているのか、それともスミスの死の時点を探っているのか、という点で曖昧であることは明確である。デイヴィドソン自身この曖昧さについて、一九八五年に出版された論文で言及している。⁽²⁷⁾ デイヴィドソンならば、「いつジョーンズによるスミスの殺害は起こったか」と問うていれば多義的ではなかった、と言うだろう(答えはもちろん「正午」である)。

文「ジョーンズがスミスを殺した」が量化する出来事はジョーンズによるスミスの殺害だけでない、とデイヴィドソニアンは考えなければならぬ。⁽²⁸⁾ その文が量化するもう一つの出来事、すなわちスミスの死は、ジョーンズによるスミスの殺害の「結果」であると言うことができる。同様のことは、「撃つ」や「被害者の妻を悲しませる」についても言える。前者は「標的の身体への弾丸の貫通をひき起こす何かをする」へ、そして後者は「被害者の妻が悲しむことをひき起こす何かをする」へと、言い換えることが可能だからである。一般に「 x_1 は x_2 を ϕ した(x_1 ed x_2)」の形をした行為文の多く(全てではない)が、次のような論理形式をもつと言えるだろう。⁽²⁹⁾

- (k) (3e₁) (3e₂) (Action(x_1 , e₁) & Was ϕ ed(x_2 , e₂) & Caus-
ed(e₁, e₂)).

(こ)で行為の結果を表すのに受動形を使ったのは、「死(Death)」や「死ぬこと(dying)」のような結果の名となる特別の名詞や、名詞化すべき対応の自動詞がつけねにあるとはかぎらないからである)。

(j)や(k)のような行為文の論理形式の新しいヴァージョンは、一九六七年にデイヴィドソンが与えた形のものでは説明し切れない多くのことを説明する。たとえばそれによって、「七時に爆破する」と予告して七時に時限爆弾を仕掛ける爆弾犯が誠実でないことも説明できるのである。⁽³⁰⁾

さて、われわれの問題に関しては以下のことが明らかになる。これまで(e)「スミスの死の三時間前にジョーンズによるスミスの殺害があった」と、(f)「スミスが死ぬ三時間前にジョーンズがスミスを殺した」をあまり区別せずに扱ってきたのであるが、(e)と異なり(f)は正しくないことを言っている可能性がある。つまり、(f)の「三時間前に(three hours before)」が、その後(英文では左側)の文が量化する二つの出来事の両方に、その前(英文では右側)の文が量化する一つの出来事を関係づけているのだと解釈すれば——すなわち、殺害というジョーンズの行為とその結果であるスミスの死の両方に、スミスの死を関係づけているのだとすれば——、(f)は正しくないことになるのである(スミスの死がスミスの死それ自身に先

行することはありえないから)。

さらに「スミスがジョーンズに殺された」は、「ジョーンズがスミスを殺した」と論理形式において区別はないが、語用論的に異なっており、それが量化する二つの出来事のうちではスミスの死の方を「前面に出している」と言うことができるかもしれない。よって(f)から

(i) スミスは死ぬ三時間前にジョーンズに殺された (Smith was killed by Jones three hours before he died)

への書き換えは同値変形のようなものであるにもかかわらず、その語用論上の含みから(i)はいっそう受け入れがたく感じられるのである。⁽¹⁾もし(i)の「三時間前に」がスミスの死とスミスの死を関係づけているとしか解釈できないのであれば、(i)は誤りになる。だがそのように(i)や(f)が偽であるかもしれないということは、デイヴィドソンの立場を脅かすものではない。というのは、かりに(f)や(i)が偽であるとしても、妥当でないのは(e)からそこに至る推論だからである。⁽²⁾

なぜ、スミスが死ぬまで「スミスを殺した」と言えないのだろうか。私の考えでは「ジョーンズがスミスを殺した」と言うのが真であるには、その文が量化する二つの出来事の時点とともに発話の時点より前でないならならぬ。⁽³⁾したがって、ジョーンズによるスミスの殺害である行為がすでに終了し、そのうえスミスの死がもはや(医学的に見て)確定であったとしても、スミスの死が生起しない

かぎりそのように言うのは正しくない。われわれの例で一月一日の午後一時半に「ジョーンズがスミスを殺した」というのが真でないのは、ジョーンズによるスミスの殺害が終了していないからではなく、スミスの死がまだ生起していないからなのである。

6. 過去の出来事の再記述について

殺害の時間の問題は、デイヴィドソンの同一性テーゼを退ける決定的な論証を提出しなかった。もちろんそのことがテーゼの妥当性を証明するわけではない。ただ、前節で提示した行為文の論理形式の新ヴァージョンは、そのテーゼを受け入れることの有利さを間接的な仕方でも示しているように思う。たとえば、デイヴィドソンの立場から、以下の事柄をうまく説明することができる。次の文を考えよう。

(m) ジョーンズによるスミスの殺害は正午にあった。(The killing of Smith by Jones occurred at noon.)

この(m)と異なり、

(n) ジョーンズはスミスを正午に殺した (Jones killed Smith at noon)

が出来事の生起の時点の特定に関して多義的であることは、すでに示したとおりである。ここで述べたいのは(㉓)と次の(㉔)との類似性である。すなわち

(㉔) 『パルシファル』の作曲者は一八一三年に生まれた。

上の(㉓)と(㉔)においてまず問題となっている出来事はそれぞれ殺害と誕生であると考えるべきであろう(そのことは必ずしも論理形式によつてのみ分かるわけではないかもしれないが)。しかし二つの文は、それぞれスミスの死および『パルシファル』の作曲という後の出来事③の存在を示唆している。すなわち(㉓)も(㉔)も後の出来事が生起して初めて可能となるようなより以前の出来事の記述を含んでいる(か、少なくとも暗示している)③。ゆえに、(㉓)同様、スミスの死がすでに生起したことを示す(㉓)も午後一時半に述べられると偽になるのである。

「スミスの死によつてジョーンズによるスミスの狙撃が殺害になった」という言い方はある意味で正しい(それでも「スミスが死んだとき、ジョーンズによるスミスの狙撃が殺害になった」と言うときと少しおかしく聞こえる)。われわれはきわめて自然に「リヒャルト・ワーグナーが『パルシファル』を作曲したことで、亡きヨハナは『パルシファル』の作曲者の母になった」と言うのである。ここで「〜になる」という動詞は周辺の意味で使われている。③ 同じような意味で、一般に出来事は「ついこの間の出来事」から「ずっと前

の出来事」になつていく。変化するのは——この例が鮮やかに示すように——出来事ではなく出来事に対するわれわれの語り方なのである。

前節で(f)が誤りになるような解釈を示した。それを別にしてもなおその(f)や、そして(e)に奇妙な響きがあるとすれば、スミスが死ぬ前にジョーンズのある行為をスミスの殺害として語りえたかのような印象を——言い換えれば、ジョーンズがスミスを狙撃した時点でスミスの死が生起することが決定されていたかのような印象を——それらから受けるためであろう。しかし(e)や(f)にそのような含意はない(e)や(f)が真であるなら、スミスの死が生起したということは決定的であるが)。発話の時点に注意する必要がある。(e)や(f)は、スミスのその死という個別的な出来事がすでに生起してしまつた時点から溯つて、過去について何ごとかを語っているのである。(e)や誤りとされない解釈における(f)が(o)などと共有するのは、そうした遡及的な語り方である。最近の出来事はどそれについて多くのことを語りうる、という直観に惑わされてはならない。われわれはすでに生起した出来事について、ある期間ある事柄を語りえないのである。ある出来事をまさに目の当たりにしたとしても、今後それがどのような出来事として記述されることになるかを言うことはできない。その意味で過去が未来に対して開かれているという結論は、別段目新しいものではない。③ ただ、時間の経過とともに過去に次々と新しいパースペクティヴを与えていくというわれわれの認識活動のパターンが、「殺す」のような非常に基本的な動詞の中にさえ見い

出される事実には、少しばかり驚いてよいかもしれない。⁽³⁸⁾

注

(1) L.H. Davis, "Individuation of Actions" (1970); J.J. Thomson, "The Time of a Killing" (1971).

(2) 日本語において出来事の名を作ることは特有の困難さがある(それはたんに、定冠詞に相当するものが無いということだけではない)。したがって、生じるかもしれない曖昧さを回避するため、例文には英文を併記する。たがいすれにせよ、ここで論じる殺害の時間の問題は英語においても日本語においても生じる問題である。

(3) たとえば D. Davidson, "Actions, Reasons, and Causes" (1963), p.4 あるいは "Agency" (1971), pp.57-58 を参照。

(4) 特定の種類の同一性言明を受け入れるか否かを指標にして、出来事をどのようなものと考ええるかについての様々に異なる立場を、区別することができるだろう。たとえば

(i) ジョンが歌ったこと＝ジョンが大声で歌ったこと (John's singing = John's singing loudly)

および

(ii) ジョンがスイッチを入れたこと＝ジョンが明かりをつけたこと (John's flipping the switch = John's turning on the light)

について、A・ゴールドマンやJ・キムは(i)、(ii)のいずれもいかなる状況下であれ不可能であると考ええる。また、(i)のような同一性言明にきぎって可能であると考ええる論者もいる(注9を見よ)。デイヴィッドソンは、(i)はもちろん、(ii)のような形の同一性言明も適切な状況のもとで可能であり、しかも出来事に関するわれわれの言説の中で重要な

位置を占めると考える。その意味で、(ii)の形の同一性言明を認めることがデイヴィッドソンの考え方を特徴づけていると言うことができる。このようなデイヴィッドソンの立場は、G・E・M・アンスコムの有名なポンプ操作者の議論に由来するものである。そこで、(ii)の形の同一性言明を「 \sim によって (by)」の関係によって規定するとなれば、

(iii) ジョンが手を上げたこと＝ジョンが合図したこと (John's raising his arm = John's signalling)

は(ii)と同タイプと見なされるべきであらう。ところが、(iii)のような同一性言明は適切な状況のもとで可能であるが(ii)は認められない、という立場も考えられる。この論文の議論とは関係しないが、デイヴィッドソンの同一性テーゼに曖昧さが無いわけではない(注9も見よ)。(5) A. Goldman, "The Individuation of Action" (1971), pp.767-768, および J. Kim, "Events as Property Exemplifications" (1975), p.169, fn.22.

(6) 行為の実行 (doing of the action) を出来事のカテゴリーから厳格に区別する哲学者もいる。Z・ヴェンドラーは、出来事と違って行為の実行は時間の特定ができないかもしれないと考える (Z. Vendler, "Agency and Causation" (1984), n.12)。したがってわれわれが「 \sim ジョーンズはスミスを殺したのか」という問いにうまく答えられないとすれば、それは問いがカテゴリー・ミステイクだからである。この立場において殺害の時間の問題はそもそも生じないが、デイヴィッドソンと正面から衝突することもない。よってここであらうした考えについて論じることはしない。

(7) L・デイヴィス、J・J・トムソンの他に、M・C・ピアズリーが同様の見解を述べている (M.C. Beardsley, "Actions and Events" (1975))。また、「非原始的惹起 (non-primitive causing)」という観点から問題を捉えるI・タールバーグも、結局はこうした立場をとる

」などなき (I. Thalberg, "When Do Causes Take Effect?" (1975)).

(8) Thomson, "The Time of a Killing," pp.122-123.

(9) われわれのケースで、スミスを撃つようジョーンズが命令されていたとする。デイヴィスによれば、その場合ジョーンズがその命令に従ったことはジョーンズによる狙撃より長くも短くもないので、それらは同一の行為である (Davis, *op.cit.*, p.529)。ピアズリーも同様の見解を述べている (Beardsley, *op.cit.*, p.269)。彼らがデイヴィドソンの同一性テーゼを「部分的に認める」ことになるのかどうかは、そのテーゼをどう規定するかに依り、ある程度恣意的な事柄である。一方、トムソンはいかなる意味でもデイヴィドソンの同一性テーゼを認めないが、ゴールドマンのような立場も拒否している (Thomson, "Individuating Actions" (1971))。(注4も見よ)

(10) Thomson, "The Time of a Killing," p.127. トムソンは例を変えてこの不自然さを軽減しようとする。彼女は次のような状況を想定している。ある人が電熱器のスイッチを入れる。彼はそばにいてチョココレートが溶けていくのを見ながらじっと待っている。しばらくしてチョココレートが完全に溶ける。このとき、チョココレートを溶かすことに関連して彼が行なった動作は電熱器のスイッチを入れるさいに指を動かしたことに尽くされるにもかかわらず、電熱器のスイッチを入れてからチョココレートが溶け切るまでの間の任意の時点で「彼はいまチョココレートを溶かしている」と言うことがきわめて自然である、と彼女は述べる。しかしここにはトリックがある。チョココレートを溶かす例は問題の殺害の例とパラレルではないのである。トムソンは話の中に「彼はそばにいてチョココレートが溶けていくのを見ながらじっと待っている」というエピソードを紛れ込ませている。だがこの場合、「そのとき彼はそれを溶かすためにいかなることもしていない」と言うことはできないと思う。チョココレートを溶かすことはトムソンの例ではスプレを作るという作業の一工程として述べられるのであるが、その文脈において待つこと (waiting) は——そばに立って見ていることを付

け加えるまでもなく、単に待つことだけで——れっきとした行為なのである (それはライルが述べたような意味で「ネガティブな」ものであろうが)。彼女は「チョココレートを溶かす」という動詞を「溶けたチョココレートを用意する」のような意味で——すなわち、溶けるのを待ったり、さらには溶けたチョココレートを次の容器に移し変えたりすることまでをも覆うような意味で——使っているのである。電熱器のスイッチを入れ終わったあと「彼はいまチョココレートを溶かしている」と言うことができるのはそのためである。

(11) ただしピアズリーは、「死後の行為」を進んで受け入れようとする (Beardsley, *op.cit.*, p.270)。彼に従えばわれわれは、死ねばできなくなる「活動 (activity)」のほかに、死後も為し続けられるような「行為 (action)」の観念をもつことになる。だがそのような「行為」の観念は、ふだんわれわれが抱いている行為の観念と著しく異なるものであろう。

(12) この節で述べたデイヴィスやトムソンの立場に対して、日常の言葉使いが有利な証拠を提出するように見える場合がある。つまり、ときにわれわれは被害者の死をも含む出来事を指して「殺害」と言うのである。ここで「殺害」と「殺害事件」を区別する必要がある。スミス殺害事件は、複合的な (そして場合によっては非連続的な) 出来事であり、ジョーンズによる狙撃という行為だけでなく彼の銃から発射された弾丸の飛行やスミスの死といった出来事をも部分として含んでいる。だがそのような殺害事件が、全体として、誰かの行為であることはない。したがってそれは、狙撃の行為と同一視されうるようなものではないのである。デイヴィドソンの側からすれば、トムソンやデイヴィスは殺害と殺害事件を混同していると言うことができるだろう。

(13) A.R. White, "Shooting, Killing and Factly Wounding" (1979); J.F. Vollath, "When Actions Are Causes" (1975). また「トムソンも、時間に関する特定の表現が非外延的な文脈を形成すると考えてデイヴィドソンの同一性テーゼを残す道を——彼女自身そのような選択扱は

取らなうが——示唆している (Thomson, "The Time of a Killing," pp.128-130)。

- (14) White, *op.cit.*, p.7. ホワイトの例は「一九七五年の四月に書いた書評をその十月に同僚が読んで感情を害されるというものである。彼によれば「私が同僚の感情を害したのは、四月でも十月でもその間の期間でもなく、せいぜい一九七五年なのである」(*ibid.*)。Vollrath, *op.cit.*, p.335 参照。

- (15) White, *op.cit.*, p.8.

- (16) Vollrath, *op.cit.*, p.336.

- (17) *ibid.*, p.338.

- (18) P. Geach, *God and the Soul* (1969), p.72 を参照。単なるケンブリッジ変化の典型としてキーチがあげるのは「二十世紀のある学生に尊敬されるようになることでソクラテスが被る『変化』といったものである。彼はそれを「にせの変化」として提出した。

- (19) Vollrath, *op.cit.*, p.338.

- (20) Davidson, "The Individuation of Events" (1969), p.177. ナイヴィンソンはすでに一九六九年のこの論文の中で「出発前の宇宙船の貯水タンクに毒を入れることによって宇宙飛行士を毒殺した場合、「その宇宙飛行士が死ぬずっと以前に私は彼を殺していたことになる」と言うのは正しい」としている。

- (21) たとは Davidson, "Adverbs of Action" (1985) を参照。「結果の時点に到達するまで、われわれはある行為を、そのような結果をもつ行為として語るじやができない。しかし結果への到達がその原因「その行為」を変えるのではない。変わるのはただ「...われわれがそれについて言うこと」である」(*ibid.*, pp.236-237)。また G.E.M. Anscombe, "Under a Description" (1979), p.226, p.227 や L.B. Lombard, *Events* (1986), p.156 参照。

- (22) Davidson, "Agency," p.58.

- (23) Anscombe, *op.cit.*, p.227. アンスコムはこの方法を「ゴールドマン

によって指摘された別種の奇妙さを取り除くために使っている。

- (24) たとは フォルラットがこの点を指摘していた (Vollrath, *op.cit.*, p.333)。ただし彼はそこから「同一の行為ならば同一の時間領域を占める」という考えの放棄へと議論を進めるのである。

- (25) Davidson, "The Logical Form of Action Sentences."

- (26) もちろん(i)における「ジョーンズの行為であるようなx」とは定義により、ジョーンズによるスミスの殺害にはかならない。そこで同一の行為が(i)と(ii)を真にすることを明確にするために、

(3x) (3y) (Killed (Jones, Smith, x) & Action (Jones, x) & Died (Smith, y) & Caused (x, y)).

という形で表してもよいだろう。さらにわれわれの例では、「Action (Jones, x)」のxを「Shot (Jones, Smith, x)」と置き換えてもよい(そうすると「ジョーンズがスミスを殺した」の論理形式以上のものでないことが)。

- (27) Davidson, "Adverbs of Action," p.237.

- (28) デイヴィッドソニアンにかぎらず、因果分析の可能な行為文が行為の結果をも量化していると考える論者は(そのような考えに転向した論者も含めて)近年多い。デイヴィッドソン本人も前掲の一九八五年の論文においてその考えを示唆している (*ibid.*, "The Logical Form of Action Sentences," p.125-126 を比較せよ)。またすでに述べたロンバード (Lombard, *op.cit.*)、ヴェンダー (Vendler, *op.cit.*)、あるいは J. ホーンズビー (J. Hornsby, *Actions* (1980), pp.124-132)、L. ベーンハース (L. Persons, *Events in the Semantics of English* (1990), p.161) とした人々が「同様の(あるいは類似した)考えを、暗に明に示している。

- (29) ロンバードは「xはxを死した (x died y)」の形をした文の多くが「xがxを死している (x's being died)」をひき起す何かを

した」に分析可能であると考える (Lombard, *op.cit.*)。xがyに「y's being *dec'd*」は、ロンバードによれば、xの行為 (x's *doing of y*) があたらしい状態を指示する。そのように考えることは、ロンバードのより広い関心からすれば重要であるかもしれない。しかしここでは簡単に、行為の結果は出来事であると考えたい。すなわちyがもうyでいられているという状態への変化という出来事が、xがyをyにしたことの結果であると考えたい。そう考えれば、次のような英語特有の曖昧さに煩わされることもないだろう。つまりロンバードが言うには、たとえば「the door's being closed」は「someone's being killed」などの場合と違って、そのような状態への変化があったということを含意しない意味でも——すなわち「ドアが閉まっていること」の意味でも——使われるので、注意しなければならないのである (*ibid.*, p.151)。

(30) 「aはbを午後七時に爆破した」の論理形式が(i)の形でしか表記しえないとすると、われわれは、通常の解釈でその文を

(3x) (Blew up(a, b, x) & At(7 p.m., x))

と記号化すべきではないとは思ふものの、そこで詰まってしまう。しかし、(k)のような表記法を手にしたなら、

(3x) (3y) (Action(a, x) & Was blown up(b, y) & Caused(x, y) & At(7 p.m., y))

と、正しく、記号化することができるのである。

(31) トムソンとピアズリーは、無自覚に、このトリックを使っている (Thomson, "The Time of a Killing", p.120, 121, および Beardsley, *op.cit.*, p.270)。

(32) とはいえいささか不意なことに、デイヴィッドソン自身が(f)の形のものを用いて問題を論じている ("The Individuation of Events,"

p.177, および "Adverbs of Action," p.236)。

(33) Davidson, "The Individuation of Events," p.177, および Lombard, *op.cit.*, pp.154-155 と比較せよ。

(34) (n)は「バルシファル」の作曲者の誕生」という記述を含んでいない。しかしわれわれは、何回も誕生する人間などいいことを知っている。なので、(n)においては「バルシファル」の作曲者のその誕生が問題になっていると思うことだろう。

(35) アンスコムはこうした場合、慎重にも、「become」ではなく「come about」の語を使ひ (Anscombe, *op.cit.*, p.228)。一方J・ベネットはデイヴィッドソンの立場に近いのであるが、「変化する (change)」の語をときにホワイトやフォルラートのような仕方で使用している (J. Bennett, *Events and Their Names* (1986), pp.198)。

(36) ただし、デイヴィッドソンの立場をとらなければこうした適及性を説明できないというわけではない。たとえばホワイトは、殺害と致命傷を与えたこと (fatal wounding) とを区別し、後者は狙撃と同一の時間領域を占めると述べている。狙撃と致命傷を与えたことに関する部分だけを見れば、ホワイトは全くデイヴィッドソンのものである。「被害者が死ななければ、そして死ぬまでは、狙撃は殺害ではない。被害者が死んだなら狙撃は致命傷を与えたことであるが、しかし死んだ時になってはじめてそうだというわけではない」 (White, *op.cit.*, p.9)。

だが殺害と致命傷を与えたこととの区別はそれほど簡単ではない。ホワイトは殺害を、死をもたらす結果となった狙撃に分析するのであるが、それと致命傷を与えた狙撃のいったいどこが違うと言うのだろうか。一方、デイヴィッドソンの同一性テーゼを拒否したとしても、狙撃を「殺害という行為の最初の部分」や「標的の死の原因」と再記述することは可能である。しかしその場合、「ジョーンズがスミスを殺した」という単純な文の適及性を説明するのにも、かなり複雑なことを述べなければならないだろう。さらに、デイヴィッドソンの同一性テーゼを否定する論者は一般に、出来事に関する同一性言明そのもの

を取ると足らないうちの、あるいは厄介なものと思える傾向がある（たゞそれは Thalberg, *op.cit.*, p.584）のび、彼らはいかに述べたような適及的な語り方を説明しようとは思わなうかも知れない。

(27) それは、一九六〇年代に A・C・ダントが、歴史叙述を分析した有名な著書の中で強調したようにある（A.C. Danto, *Analytical Philosophy of History* (1965)）。

(28) はなからそのような形に分析可能な全ての動詞に「いふ」、いふに及ぶ「た」などがあつてはあつて、私は考えている。

文庫

Anscombe, G.E.M., "Under a Description," *Notes*, 13(1979), 219-233.

Beardsley, Monroe C., "Actions and Events: the Problem of Individuation," *American Philosophical Quarterly*, 12(1975), 263-276.

Bennett, Jonathan, *Events and Their Names*, Hackett Pub., 1988.

Danto, Arthur C., *Analytical Philosophy of History*, Cambridge U. Pr., 1965. [原本英大誌『物語と歴史』国文社、一九八九年。]

Davidson, Donald, "Actions, Reasons, and Causes" (1963), in *Essays on Actions and Events* Oxford U. Pr., 1980 [国語論叢・柴田昌良訳『レタ・タ・出来事』国語論叢「レタ・タ」(EAE), 3-19.

——, "The Logical Form of Action Sentences" (1967), in *EAE*, 105-148.

——, "The Individuation of Events" (1969), in *EAE*, 163-180.

——, "Agency" (1971), in *EAE*, 43-61.

——, "Adverbs of Action," in B. Vernazen and M. Hintikka (eds.),

Essays on Davidson: Actions and Events, Oxford U. Pr., 1985, 230-241.

Davis, Lawrence H., "Individuation of Actions," *The Journal of Philosophy*, 67(1970), 520-530.

Geach, Peter T., *God and the Soul*, Routledge and Kegan Paul, 1969.

Goldman, Alvin I., "The Individuation of Action," *The Journal of*

Philosophy, 68(1971), 761-774.

Hornsby, Jennifer, *Actions*, Routledge and Kegan Paul, 1980.

Kim, Jaegwon, "Events as Property Exemplifications," in M. Brand and D. Walton (eds.), *Action Theory*, D. Reidel Pub., 1975, 159-177.

Lombard, Lawrence B., *Events: a Metaphysical Study*, Routledge, 1986.

Parsons, Terence, *Events in the Semantics of English: a Study in Subatomic Semantics*, MIT Pr., 1990.

Thalberg, Irving, "When Do Causes Take Effect?", *Mind*, 84(1975), 583-589.

Thomson, Judith J., "The Time of a Killing," *The Journal of Philosophy*, 68(1971), 115-132.

——, "Individuating Actions," *The Journal of Philosophy*, 68(1971), 774-781.

Vendler, Zeno, "Agency and Causation," *Midwest Studies in Philosophy*, 9(1984), 371-384.

Vollrath, John F., "When Actions Are Causes," *Philosophical Studies*, 27(1975), 329-339.

White, Alan R., "Shooting, Killing and Fatally Wounding," *Proceedings of the Aristotelian Society*, 80(1979-80), 1-15.

* この論文は、京都科学哲学コロキウム第一五九回例会（一九九二年四月二十六日、京大会場）における発表の草稿をもとにしている。有益なコメントを下された参加者の方々に、お礼を申し上げます。